

メッセージアウトライン

ルカ 1:26～45「マリヤの信仰」

[26-27]「ところで、その六か月目に、御使いガブリエルが、神から遣わされてガリラヤのナザレという町のひとりの処女のところに来た。この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなづけで、名をマリヤといった」

御使いが祭司ザカリヤに告げたことばのとおり彼の妻エリサベツが妊娠してから六か月目になった。今度は同じ御使いガブリエルが神から遣わされてガリラヤのナザレという町のひとりの処女のところに来た。

「ナザレ」…イスラエルの北部のガリラヤ湖の西約 20 km程のところにあった小さな田舎町。「マリヤ」…ダビデの家系のヨセフという人のいいなづけであった。彼女はごく普通の目立たない女性であったと思われる。

[28-33]「御使いは、入って来ると、マリヤに言った。『おめでとう。恵まれた方。主があなたとともにおられます。』しかし、マリヤはこのことばにひどくとまどって、これはいったい何のあいさつかと考え込んだ。……」

マリヤは御使いの「おめでとう…」とのことばにひどくとまどい恐れた。御使いは、①マリヤが神から恵みを受けたこと、②みごもって、男の子を産むこと、③その名をイエスと名づけること(イエスとは「主は救い」と言う意味)、④その子はすぐれた者となり、いと高き方の子(神の子)と呼ばれ、⑤神は彼にダビデの王位を与え、⑥とこしえにヤコブの家(イスラエル)を治め、その国は終わることがないと伝えた。

[34-38]「そこで、マリヤは御使いに言った。『どうしてそのようなことになりえましょう。私はまだ男の人を知りませんのに。』御使いは答えて言った。『聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます。ご覧なさい。あなたの親類のエリサベツも、あの年になって男の子を宿しています。不妊の女といわれていた人なのに、今はもう六か月です。神にとって不可能なことは一つもありません。』マリヤは言った。『ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。』こうして御使いは彼女から去って行った」

マリヤの「どうして…」との問いに、御使いは親類の高齢のエリサベツの妊娠のことを教え、人間にとって不可能と思われるようなことでも、神にとって不可能なことは一つもないことを告げた。それでマリヤは御使いのことばをすなおに受け入れ、「…どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように」と答えた。マリヤは自分でできる最善の決断をした。ルカ 1:5～25 の祭司ザカリヤの場合と比べるとその違いがよくわかる。全能の神に不可能はない。私たちもマリヤのように、このことを心から信じる必要がある。

[39-45]「そのころ、マリヤは立って、山地にあるユダの町に急いだ。そしてザカリヤの家に行って、エリサベツにあいさつした。エリサベツがマリヤのあいさつを聞いたとき、子が体内でおどり、エリサベツは聖霊に満たされた。そして大声を上げて言った。『あなたは女の中の祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。私の主の母が私のところに来られるとは、なんということでしょう。ほんとうに、あなたのあいさつの声が私の耳に入ったとき、私の胎内で子どもが喜んでおどりま

した。主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなこと
でしょう。』」

マリヤは御使いのことばを信じて、親類のエリサベツを訪問した。「山地にあるユダ
の町」…エルサレムの近く。ナザレからは山道を歩いて約 100 km程の距離。マリヤ
がエリサベツにあいさつをした時、彼女の胎内で子が喜びおどり、彼女は聖霊に満
たされた。エリサベツは「…私の主の母が私のところに来られるとは、何というこ
とでしょう」とマリヤを祝福した。そして彼女は、「主によって語られたことは必ず
実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう」と言った。

神はガリラヤのナザレという田舎町の平凡な一女性マリヤを恵みによって選ばれた。
そして、彼女はこの神の選びに信仰の従順をもってこたえた。それゆえにこのこ
とを通して神の救いの計画が実現することとなった。金持ちや、家柄のよい人や学歴
のある人が幸いなのではなく、主によって語られたことは必ず実現すると信じき
った人が幸いなのである。